



赤屋小だより



令和2年度
安来市立赤屋小学校
R2. 7. 31 第9号
文責 勝部 篤

1学期の重点目標:あかるく たくましい子

ホームページ:赤屋小で検索ください

77日間の頑張り

1学期が今日で終わります。授業日数としては6日間ですが、新型コロナウイルス感染症対策のため11日間の臨時休業日を含めると、77日間の長い1学期でした。そのような中、保護者の皆様、地域の皆様にはご理解・ご協力いただき、大きな事故やけがもなく過ごすことができましたこと、大変感謝申し上げます。

児童は、対外的な行事や大きな行事の中止や延期に加え、地域の方にお世話になって行う「赤屋学」、社会見学等、例年に比べ制限されたものでした。毎日教室で過ごす時間が多く、できる努力を積み重ねてきました。教室を見て回ると、落ち着いた雰囲気の中で個の課題に集中して取り組む姿、活発に意見を出し合う姿、友達の頑張りや考えを認め合う姿、先生と共に笑い合っ楽しんでひと時・・・等々のクラスも、友達と共に、学びを深め、絆を強くしている姿は本当に素晴らしく感じました。

本日お子様が持ち帰った「わかばと」には、今学期の頑張りや、担任からの深い愛情やメッセージが込められています。ご家庭でもご覧になり、1学期の振り返りをしていただけたらと思います。

赤屋教育後援会

6月26日(金)、赤屋交流センターにおいて赤屋教育後援会委員総会が開催されました。小林勝則会長様のもと、会員の皆様にはご寄付を賜りますこと、さらに、自治会長の皆様方には寄付金の納入等でも大変お世話になりますこと、御礼申し上げます。「地域の宝」であります子供たちのために、格別のご支援ご協力を賜りますようお願いいたします。

川遊び

7月21日(火)、22日(水)の昼休みを使って「川遊び」をしました。今年は「密」にならないように、高学年と低中学年に分けて実施しました。児童は大喜びで川に入り、生き物を捕まえたり、観察したり、川底の砂の感触を楽しんだりしました。



蛇足ですが、川辺で右の写真のようにバナナの木を見つけました。この木がここに生えている謂れをご存じの方は学校までお願いします。

夏休みの過ごし方 メディアにご注意!



今日の終業式後、生徒指導主任より、「夏休みの過ごし方」について話をしました。車や水の事故もなく、「夏休みがあつてよかったなあ。」と思えるような夏休みにしてほしいです。

全国的にも、近隣の松江市、また、安来市においてもオンラインゲームでのトラブルが起こっています。事例としては、「児童が保護者の了解を得ずに課金していた為、後日クレジット会社から20万円以上の請求があり初めてその事実を知った。」等のことです。大人の関わりをお願いします。

8, 9月の予定 8月23日 PTA環境整備作業
8月28日 始業式 9月10日~修学旅行
9月11日 遠足 9月27日 運動会

わが家でも参考にしたい記事を見つけました→

今日からやってみよう

いろいろなカラダの仕組み
今日ぞ家族を楽しもう

出典:「いろいろなカラダ」より

参考

(編集・発行元「モラロジー研究所」に許可を得て転載しております。)

心の対話の始め方



黒川伊保子

株式会社感性リサーチ 代表取締役社長

【素のトリセツ】著者
昭和34(1959)年、長野県生まれ。奈良女子大学理学部物理学科卒業後、関西大学社会学部社会心理学専攻在学中、14年にわたるAI(人工知能)の研究開発に従事。その後、コンサルタント会社勤務、民間の研究開発を経て、平成15年に感性リサーチを設立。代表取締役社長に就任し、現在に至る。男女の脳の「とっさの使い分け」の違いを発見し、人間のコミュニケーション・ストレスの発生原因を解明。その研究成果を元に多くの書籍を世に出し、中でも『素のトリセツ』(朝日社)、『素のトリセツ』(朝日社)はミリオンセラーに及ぶ。

するのは珍しい。そこで私は質問した。
「日ごろどんなふうに話しかけていますか?」
例えば、昨日、学校から彼が帰ってきたときの会話を教えてください。」

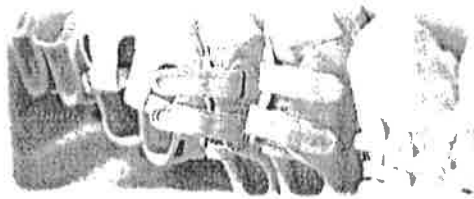
彼女は「学校、どう?靴、揃えたの?早く宿題やりなさい、でした」と答えてくれた。日ごろの会話が透けて見えるようである。

「食べ終わったら、さつさと風呂に入つて明日の用意はできたの?」「なんで、〇〇しないの?」「だから、言ったじゃないの」

真面目で、一生懸命で、子供のことを何よりも大切にしている賢い母親がしがちな会話。5W1H型の質問(何?なんで?どこ?いつ?など)、命令と叱責で構成されている。

でもこれ、よく考えてみて。「学校、どう?靴、揃えたの?」という会話は、帰ってきた夫が「今日何してた?めい、できてるのか?」と聞くのと、まったく同じ話法なのである。話が弾むわけがない。

実は、家族との対話は、5W1Hで始めてはいけない。それは、ゴール指向問題解決型



先日、友人から悩みを聞かされた。息子と、心を通わせる会話ができない、と。二十代半ばの息子息が、会社の転勤で、実家に戻ってきたのだと言う。喜ばしいことなんだけれど、まったく会話が弾まない。自宅にいても、携帯端末を見ているばかりで、自発的に話すこともない。こちらの投げかける話題にも「ふん」「分かった」と紋切り型に返すだけ。

まるで、対話の消火器なのよ。あれじゃあ、女性にモテるわけもなく、どうしてあげたらいいのかしら……と、美しく賢くエレガントな彼女が、珍しくため息をついた。

母子の対話が弾まない理由

私は、ふと、週日、若い女性から寄せられた質問を思い出した。

いわく、八歳の息子が、私と会話してくれなくなった。少し前まで、小さな恋人のように、なんでも話してくれたのに。父親とはうれしそうにしゃべるのに、私にはめんどうくさうにする。「私なんて、もういなくてもいいのかと、悲しくなります」と、彼女は涙ぐんだ。

私は、「あれ?」と思った。八歳の男の子なんて、好奇心に溢れていて、母親になんでもしゃべりたくて仕方ないころだ。母親と断絶

とって「目標を合理的に達成するための手段」としての会話の始め方だ。

共感型対話と問題解決型対話

対話には、二種類ある。

共感し合うための対話と、問題解決のための対話。前者は、決して質問から始めない。

女子会で親しい友人に会ったとき、いきなり「会社、どう?資格取れたの?」なんて聞くだろうか。「そのスカート、いつ買ったの?」なんて問い詰めるだろうか。

普通は「そのスカート、いいね」と声をかける。すると向こうから「でしょ。この間の日曜日、〇〇で見つけたの。タイムセールで、いきなり三割引きになったから即決した」と「いつ」「どこ」「なぜ」をちゃんと答えてくれる。しかも「え、〇〇に行つたの?」「そうなのよ。それがさあ」などと、さらに話が弾むのである。

つまり「心を通わせるために会った」友人に、いきなり5W1Hの質問なんかしない。なのに、男たちはこれをする。

狩りをしながら進化してきた男性脳にとって、とっさに使うべきは、問題解決のための回路である。男たちは、何万年も荒野に出て危険な目に遭いながら、仲間と自分を同時に

教いつつ、成果を確実に残さなければ、家族を養えず、子孫も残せなかった。となれば、「？」と思ったことは即座に質問し、相手の欠点や「していないこと」を即座に指摘するしかない。それは、生き残ってきた男たちの尊厳の辯論なのである。

夫の話法が妻をイラつかせさせる

あるとき、五十代と思しき管理職男性からの質問を受けた。「なぜ、女性は質問にまっすぐに答えられないのでしょうか」

先日、家に帰ったら妻が見慣れないスカートをはいていた。新しいのかなと思い「そのスカート、いつ買ったの？」と聞いたら、少し不機嫌そうに「安かったから」と答えた。妻がらW I Hに答えられないのはよくあることで、ずっと不思議だった。なぜ、まっすぐに答えられないのだろうか？

やれやれ、お気の毒に、と私は思った。この男性は「このスカート、新しいのかなあいつ買ったの？」と尋ねているのだ。しかし、この質問、家計を預かっている者にとっては「俺に黙っていつ買ったの？」と聞こえる。だから「(あなたに黙って買ったのは安かったから」

「おかず、これだけ？」も「おかず、これだけ？(ひなあ、これで二食、称賛されるように工夫するね)」なのである。「おかず、これだけ？(一日家にいて、これほっちかよ)」なんて言っていない。万が一、皮肉だつたとしても「そうよ。卵でもかける？ ぶりかけもあるわよ」と明るく応えれば、皮肉は宙に消えてしまう。

夫の言うことを深読みしない。それだけで、家庭が一段、明るくなる。ぜひ、お試しください。

もちろん、夫である人は「心の通わない対話を誘発してしまうらW I Hに気をつけて。家にいる夫が、出かける妻に「どこ行くの？ 何時に帰るの？」と聞くのも「法度」。妻はこの質問、夫の定年退職後に、妻の脈拍が最も上がる質問と言われているくらいだ。「家にいるべき主婦が、ふらふらとどこへ行く？」と聞こえるのだそう。

化粧してよそ行きに着替えた妻には、「きれいだね」と声をかけよう。「出かけるの？ 楽しんでおいで」とほほえめば、向こうから「デパートに行ってくる。何か美味しいもの買って、夕方には帰るね」と優しく言ってくれるはず。

もちろん「お母さんの七回忌、いつだっけ？」とか「バターのどこ？」のような、第三者が主語のらW I Hに関しては、この限りではない。

と答えているのだ。妻の側には、マウンテイング(自分のほうが上だとアピールされたような)不快感が残る。当然、話は弾まず、こんなことがたび重なれば、夫は妻に話しかける勇気を失っていく。

あるいは、妻がしたことに対して、夫が「どうして、こうしたの？」と質すことがある。例えば、新しい三段ボックスをリビングに置いたときとか。妻にしてみれば「なんか、文句ある？ この辺がいつこうに片づかないのに、あなたが、何もしてくれないからじゃないの！」と逆上しそうになる。

けれど多くの場合、夫は純粋に「そうした理由」を聞いているのである。妻は、明るく「この辺が片づかないから、こうしてみたの。いいでしょ？」と答えればいい。「うん。あ、もう十センチ、こつちにすれば、これも置けるよ」「ほんとね！」なんて話が弾むかもしれない(保証の限りではないけれど)。

夫の言うことを深読みしない

ここには、二つの教訓がある。夫は妻に、いきなりらW I Hで話しかけてはいけない。そして、妻は、夫の言葉を深読みしてはいけない。

息子がモテないのは母のせい？

さて、ぐるっと話は戻って、母と息子の会話が弾まない話。

夫の問題解決型の対話にこれだけムカついているのに、母親は息子に、それをしてしまうのである。

理由は、日本の子育てが「目標」に満ちているからだ。ご飯をさつさと食べさせて、宿題をやらせて、風呂に入れて、翌朝、無事に送り出す……という短期目標、試験に合格させるという中期目標、立派な大人にするという長期目標。いくつもの目標が、私たち母親の前に立ちばだかる。

かくして「宿題やったの？」「学校、どう？」「どうして、プリント出さないの！」という、問題解決型の対話だけで、日々が過ぎ去り、いつの間にか息子は大きくなって、家を出てしまう。

これは、実は大問題なのだ。大人になった息子と、楽しい会話ができない。さらに、息子が女性にモテにくい。

男同士の会話は、基本、問題解決型なので、男子は、母親から教わらないと共感型対話をマスターするチャンスがないのである。男子の母たちは、心がけて、共感型対話を交わ

さなければならぬ。

というわけで、家族との「心通わす共感型対話の始め方」を以下に述べよう。女同士なら自然にやっていることなのに、なぜか家族にはしにくいので、女性も、あらためて聞いてほしい。

①相手の変化点やしてくれたことに気づいて、言葉にする

家に帰ってきた夫や息子が「そのスカート、新しいよね、似合うね」「あ、僕の好きなナスのカレーだ」「シャツ、洗つといてくれたんだね、ありがとう」と言ってくれたら、どんなにうれしいだろう。

だから、私は、息子にそうしてきた。離乳食を食べてくれたときも「食べてくれたのね、ありがとう」と声をかけたし、息子が描いた絵ひとつにも「あ、私の好きな色だ。うれしい」と反応した(離乳食はつかない。私は彼のセンスが大好きなのだ。彼が小中学校一年生のときに持ち帰った版画は、二十二年経った今も私の部屋のメインのインテリアだ。おかげで息子は、共感型対話をしてくれる)。

人は、基本、してもらったことしかできないのだ。

もしも、家族と心を通わす会話ができないと感じているようなら、今からでも、らW I H

の質問をぶつけたり、指図する代わりに「全部食べてくれたんだ。うれしい」「宅配便、受け取ってくれてありがとうね」「そのシャツ、かっこいいじゃん」と、声をかけてみよう。

②頼りにする

「シチューの味、見てくれる？」「お鍋に何入れようか」「明日のワンピース、どっちがいいかなあ」「今、会社で、こんなことで煮詰まってるなあ。何かアイデアない？」のように頼りにしてみる。

頼りにすると、家族がしてくれることが増え、さらに①の手が使える。

③社会的事案への意見を聞いてみる

頼りにしても反応がない相手には、社会的事案をテーマに意見を聞いてみるのも手。「検察人事の報道、あなたはと思う？」とか「九月入学って、どうなのかな」とか。

コロナショックのおかげで、リモートワークとリモートスタディは一気に市民権を得た。人が家にいる時間が、人類史上、最も長くなる時代の幕開けである。家族のコミュニケーションについて、私たちはもつと真剣に取り組まなければならない。まずは、対話の改革から始めよう。

読者プレゼント 黒川さんの著書「妻のトリセツ」を抽選で3名様にもプレゼント。 著者ハガキかWEBアンケート (http://bit.ly/reirou0207または右記QR) から応募ください。